

# 教員養成大学において小学生向け漢字ドリル指導法を学ぶための

## 講義パッケージの開発

仲間 妙（東京学芸大学）・佐藤 和紀（常葉大学）・梶本 佳照（新見公立大学）  
磯崎 ひろみ（教育同人社）・高橋 純（東京学芸大学）

概要：教員志望の学生を対象に、小学生向け漢字ドリル指導法を学習させるための講義パッケージを開発し実施した。講義の内容は、漢字ドリルの基礎知識を学び、模範授業映像の視聴後、指導法を練習するというものであった。講義の事前事後に漢字ドリル指導の自信や、講義から特に何を学んだか、何をさらに学びたいかを明らかにする質問紙調査を行った。その結果、漢字ドリル指導の自信の上昇が見られた（研究1）。また、本講義が、漢字ドリル指導のイメージを具体的に伝えることに効果的であることが示唆された。さらに、授業以外での漢字指導など、より幅広く・具体的な漢字指導法についての講義を学生が求めていることも示唆された（研究2）。

キーワード：教員養成，漢字指導，漢字ドリル指導，講義パッケージ

### 1 はじめに

文部科学省の「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」（2017）において、教職課程には実践性が求められていることが示された。このことから、教員養成段階において学生は、従来以上に実践的かつ能動的に指導法を学ぶ必要があると考えられる。

本研究では、教員養成大学の学生が小学校における漢字ドリル指導法を学習するための講義を開発し、実践した。その効果を、学生の漢字ドリル指導の自信の度合いから明らかにすることにした（研究1）。また、学生がこの講義から何を学んだかも明らかにすることとした（研究2）。

### 2 実践した講義の概要

小学校における漢字ドリル指導法を学習させるため、次の3つのステップからなる講義を開発した（図1）。その際、学生が実践的かつ能動的に学べるよう、指導法や指導事例などを知識として学ぶだけでなく、実際に指導法を練習す

るなど、体験的な学習も取り入れた。

- 漢字ドリルの基礎知識を学ぶ
  - 漢字ドリルを見ながら、思い出を話し合う。
  - 個人でドリルを体験し、体験の感想をグループ・全体で共有する。
  - 漢字ドリルを使っての指導内容を考え、ワークシートに記入し、グループで共有する。
  - 全体で、指導する内容を詳しく確認する。
- 模範授業映像から指導事項・指導法を学ぶ
  - 指導内容を確認しながら模範授業映像を視聴し、感想を共有する。なお、模範授業映像の流れは、表1の通りである。

表1 模範授業の構成

1	読みを確かめさせる
2	意味を説明する
3	熟語を読ませる
4	書き順を教える
5	部首を確かめさせる
6	空書きして覚えさせる
7	なぞり書きをさせる

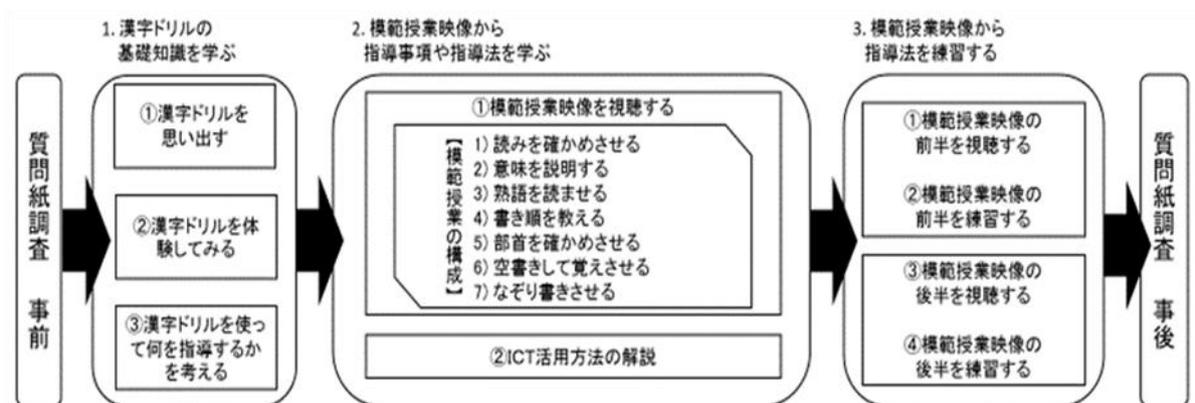


図 1 実施した講義の構成および実験計画

- ・指導順序を確認しながら、再度模範授業映像を視聴する。
- ・ICT活用方法の解説を聞く。
- 3. 模範授業映像から指導法を練習する
  - ・教師の言葉に注目して、模範授業映像の前半を視聴する。
  - ・ペアで模範授業映像の前半を練習する。
  - ・教師の言葉に注目して、模範授業映像の後半を視聴する。
  - ・指導のポイントの解説を聞く。
  - ・ペアで模範授業映像の後半を練習する。

### 3 講義パッケージの構成

大学教員が講義でそのまま利用できるよう、以下の3つのコンテンツをパッケージ化した。

- (1) 講義スライド (発話セリフ付き)
- (2) 模範授業映像
- (3) ワークシート

必要なICT機器を用意するだけですぐに講義が行えるようになっている。

## 4 研究 1

### 4.1 研究の方法

#### (1) 調査対象および調査時期

調査対象はX国立大学教育学部の講義を受講する2年生(20名)と、Y私立大学教育学部の講義を受講する3年生(27名)の計47名であった。実施期間は2017年6月～7月であった。

### (2) 評価の方法

学生の漢字ドリルを活用した漢字指導への自信の変化を測定するため、講義の事前・事後に質問紙調査を行った。質問紙は2問で構成した(表2)。4件法で質問し、4:かなり、3:だいたい、2:あまり、1:まったく、とした。

表 2 質問紙の構成

1	私は、小学生に「漢字指導」ができる知識はあると思う。
2	私は、小学生に「漢字指導」が実際にできると思う。

### 4.2 結果

質問紙調査の結果、全ての項目で講義前よりも講義後の平均点が高かった(質問項目1事前  $M=2.28(SD=0.61)$  事後  $M=3.13(SD=0.39)$ , 質問項目2事前  $M=2.09(SD=0.54)$  事後  $M=2.91(SD=0.50)$ )。一要因(事前事後)の分散分析の結果、講義の効果はすべての項目で有意であった

(質問項目1 ( $F(1,46)=78.46, p<.01$ )), 質問項目2 ( $F(1,46)=55.88, p<.01$ ))。結果を表3と図2に示す。

表 3 各質問項目の平均点と標準偏差

	講義前調査		講義後調査	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差
質問項目1	2.28	0.61	3.13	0.39
質問項目2	2.09	0.54	2.91	0.5

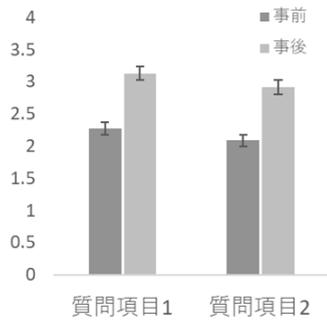


図2 事前事後の得点の変化  
(エラーバーは土標準誤差)

### 4.3 考察

全ての項目で向上がみられたことから、本講義は、漢字ドリルを活用した漢字指導の自信向上に効果的であることが示唆された。

## 5 研究2

### 5.1 研究の方法

#### (1) 調査対象および調査の時期

調査対象は研究1と同様、X国立大学教育学部の講義を受講する2年生(20名)と、Y私立大学教育学部の講義を受講する3年生(27名)計47名であった。実施期間は2017年6月～7月であった。

#### (2) 評価の方法

学生が、講義から漢字ドリル指導について、特に何を学んだか、また、何をさらに学びたいかを明らかにするため、講義の事前・事後に質問紙調査を行った。事前の質問紙は2問、事後の質問紙は3問で構成し、自由記述による回答を求めた(表4, 5)。回答の内容をカテゴリーに分類し、回答者数を集計した。

表4 事前の質問紙の構成

1	あなたが知っている漢字の【指導事項】をできる限りあげてください。
2	あなたが知っている漢字の【指導法】やその【工夫】をできる限りあげてください。

表5 事後の質問紙の構成

1	今日の講義から、漢字の【指導事項】について、学んだことをできる限りあげてください。
2	今日の講義から、漢字の【指導法】やその【工夫】について、学んだことをできる限りあげてください。
3	今日の講義から、小学生に漢字を指導するためにもっと知りたかったことを、できる限り箇条書きして下さい。

### 5.2 結果

#### (1) 知っている漢字の指導事項について (Q1 事前)

学生がもともと知っていた漢字の指導事項としては、「筆順」40名(85%)が最も多かった。次いで、「部首」39名(83%),「読み」33名(70%),「熟語・文章」29名(64%),「成り立ち」「とめ・はね・はらい」がそれぞれ22名(47%)であった。

#### (2) 知っている漢字の指導法やその工夫について (Q2 事前)

学生がもともと知っていた漢字の指導法やその工夫としては、「空書き」37名(79%)が最も多かった。次いで、「なぞり書き」29名(62%),「くり返しやる」「(同じ部首の漢字などの)仲間集め」「声に出す」がそれぞれ8名(17%)であった。

#### (3) 講義から学んだ漢字の指導事項について (Q1 事後)

学生が講義から学んだ漢字の指導事項としては、「筆順の気を付けるべきポイント」27名(57%)が最も多かった。次いで、「7つの事項、又はその一部(7つの事項とは、模範授業で教師が実践した7つの指導事項・指導法で、①読み、②意味、③熟語、④筆順、⑤部首、⑥空書き、⑦なぞり書き、のこと。)」23名(49%),「速く回数を重ねて教える」12名(26%)であった。

#### (4) 講義から学んだ漢字の指導法やその工夫について (Q2 事後)

学生が講義から学んだ漢字の指導法やその工夫としては、「空書きを、バリエーションを変えて、段階的にやる」29名(62%)が最も多かった。

次いで、「テンポよく指導する」22名(47%)、「ICTで拡大・焦点化する」19名(40%)であった。

#### (5) 小学生に漢字を指導するためにもっと知りたかったことについて (Q3 事後)

学生が講義から、小学生に漢字を指導するためにもっと知りたいと思ったこととしては、「模範授業映像のような漢字ドリル指導の後は、どのような活動をしているのか」8名(17%)が最も多かった。次いで、「授業についていけない児童の支援方法」「テストについて」「どのくらいのペースで教えるのが適切なのか」がそれぞれ6名(31%)であった。

### 5.3 考察

講義前の質問用紙の結果から、教員養成大学の学生は、もともと漢字の指導事項をかなり知っていることが推測できた(Q1 事前, Q2 事前)。講義後の質問用紙の回答では、より具体的な漢字の指導事項や指導法・工夫を多くの学生があげることができていた(Q1 事後, Q2 事後)。このことから、本講義は、特に漢字ドリル指導のイメージを具体的に伝えることに効果的であることが示唆される。また、漢字の指導法やその工夫として、ICTの活用方法についての回答も得られた(Q2 事後)。高橋ら(2015)は、漢字指導の際、ICT活用そのものは漢字の正答率向上に寄与せず、どのような漢字指導法を用いるかの影響が大きいと考えられるため、指導法をICTによってどのように支援するかを検討していく必要があることを指摘している。本講義は、ICT活用そのものではなく、漢字指導法を中心とし、漢字指導法をよりよくするためにICTをいかに活用するかを伝えることができており、意義があると考えられる。

一方、講義後の質問用紙の回答の結果から、漢字ドリル指導の授業そのものの指導法だけでなく、授業後の活動についてや、授業についていけない児童の支援方法についてなど、より幅広く、より具体的な漢字ドリル指導についての講義を学生が求めていることも示唆された(Q

3 事後)。

### 6 総合考察

本研究により、本講義が漢字ドリル指導の自信向上に効果的であることが示唆され、漢字ドリル指導のイメージを具体的に伝えることに効果的であることが示唆された。講義後では、学生の漢字ドリル指導の自信が向上し、また、学生が知っている漢字ドリル指導の指導事項や指導法・工夫のイメージが、より具体的なものとなっていたことから、講義で伝わった漢字ドリル指導の具体的なイメージが、自信の向上につながったのではないかと考えられる。

また、漢字ドリルの授業そのものの指導だけでなく、授業以外の活動や児童の支援方法など、より幅広く、より具体的な漢字ドリル指導についての講義も今後求められる可能性があるのではないかと考えられる。

### 7 まとめと今後の課題

本研究では、教員養成大学で求められる漢字ドリル指導法に関する講義の効果を確認した。今後、講義による知識や技能が実際どの程度定着したかも検討していきたい。

### 参考資料

文部科学省(2017) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会(第4回)配布資料、資料3 教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方(案)、  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/126/attach/1384253.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/attach/1384253.htm) (2017.8.6.確認)  
高橋純, 長勢美里, 中沢美仁, 山口直人, 堀田龍也(2015) 教員の経験年数や漢字指導法が児童の漢字読み書きの正答率に及ぼす影響, 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 No.10:53-60